

第8回セミナーを11月12日(土) 13:30~15:30に開催しました。

会場：愛知文教大学 ABUラウンジ

テーマ：現代につながる江戸時代の教育事情

講師：学び合う学び研究所 フェロー 松村 美奈 先生

セミナーの中で重要だと思ったことは「学びには『学びたい』という純粋な動機が必要」です。

寺子屋の成り立ちを通して、日本が諸外国と比較して文字文化の色合いが強い理由がわかった気がしました。武士だけに限らず庶民にまで文字を読むことが広まることで、文字（出版物）を通して、様々な文化や習わし、あるいはマナーやマニュアルが浸透していったことが、今日の日本人特有の気質といわれている「ルールを守る」「礼儀を重んじる」「他人に親切」などにつながっていったのではないかと考えました。また、庶民が読み書きだけでなく教養として芸術的分野まで習うことができたのは、江戸時代が平和で安定していたからこそ成り立つものであり、いまさらながら徳川時代の功績の大きさに驚かされました。松村先生、たくさんの学びをありがとうございました。

セミナーの中で重要だと思ったことは「学ぶ楽しさ」です。

とっても楽しいひとときを過ごさせて頂きました。知らないことを知るというのは、心から楽しいものだと思えます。この気持ちが、江戸時代の学問を支えていたのでしょうか。情報が行き交う現代でも、子どもたちにとってはまだまだ知らないことも多いもの。今日の私の気持ちを授業で感じてくれたら・・・と思います。

最近、本を読まない私のお供は、YouTube になりつつあります。先日、「溝上慎一の教育論」という番組で、「教育を江戸から考える」を観ました。松村先生のお話にもあった辻本雅史氏との対話でした。「今の学校教育は、先生が教える教育である。いい先生がよりよく教える教育になっている。江戸時代は、子どもたちにいい環境を与える。そこには手本があり、子どもたちはそれをまねて習得していく。教育ではなく子どもの学びである。」と。

例えば、手習いは手本をまねて繰り返し、上手に書くための身体スキルを身につけ、同時に文字も習得し、また、文字の練習よりも文章（特に実用文）を手本とするので、文章形態も身につけていくのだそう。江戸時代と言えば寺子屋を思い出します。そこでは、論語を一斉読したり、手をもって「いろはにほへと」を手習いしたりするというイメージであったため、認識不足であったと興味をもちました。

「江戸時代は、世の中が安定し、武士は官僚、農民は自治の世の中になった。文書の交換も必要不可欠であり、大人も子どもも学びを欲するようになった。しかし、家庭環境や地方の状況等、もっている素地が違うため、カリキュラムも往来物も一人ひとり違う。まさに個別な学びである。」という背景を松村先生から伺って、さらに関心が深まりました。先生から拝見した江戸時代の寺子屋の絵は、一見すると「学級崩壊」のようにも見えますが、でも子どもたちは生き生きと通っていたのではないかと想像します。必要性の多い学びは学ぶ楽しさを生み、子どもが自分で伸びていく力を育てていくのだらうと思いました。これからの授業作りのヒントを頂いた気がします。ありがとうございました。大学の先生から、本物のお話を伺うというのは、楽しいものです。子どもたちにも、「本物の学び」を提供できるようになりたいと思いました。

こういう企画にこそ、若い先生方が参加し、HOW TOではなく、理論を学んでいただくことを期待します。

セミナーの中で重要だと思ったことは「江戸の手習い師匠の居方」です。

江戸の学びについて、漠然としたイメージを持っていました。今回、往来物を読み解くワークショップを経験し、当時の子どもたちの自由で闊達な様子を知ることができ、とても驚いております。また、現在、日々行われている教室での学びが、さほど新しい考え方ではなく、その原点は、すでに江戸にあったのかと思い知らされました。

松村先生のお話の中で、「現在の『学び』に画一化されて息苦しさを感じることもあるが、江戸の学びには、『純粋に学びたい、知りたい』という子どもたちの動機が大切にされている。江戸時代の学びに、教育の大切な原点を見た。」との言葉が印象に残りました。

世界の子どもたちの意識調査の中で、「学びに対する意欲」が日本の子どもたちが、かなり低い現実があります。日々の教室で、子どもたちが目を輝かせて「学びたい、知りたい」を引き出す教師の居方とは、どうあるべきか。考えさせられるセミナーでした。

豊富な資料を提示していただき、江戸時代の庶民の教育について、学ぶことができました。往来ものと言われる江戸時代の教科書を見せていただき、感動しました。中でも数学の教科書の中に、円の面積の求め方が記述されていました。現代と同じように、扇型に分割して面積を求める方法が、書かれていました。面積を求める学習は、西洋のもの、現代の教育のものという思い込みがありました。

テレビ等で、素読をする武士の師弟が学習する様子を見てきましたので、暗記主体の学習というイメージが強かったです。しかし、教育は無理強いせずに、本人の意欲を大事にするということが記述されていたことに驚きました。そして、江戸時代の庶民が教育に高い関心を寄せていたこと、読み物が版画を通して、広く庶民に流通していた事実にも驚きました。

明治時代に入り、明治政府のもとで、新しい政府が営まれていった背景には、江戸時代の庶民の教育が大きく影響していると考えます。

現在の学校教育も、さまざまな変遷を経て、現在の形になっていますが、歴史的な背景を知ることの重要性に、改めて気づかされました。ありがとうございました。

寺子屋についてほとんど知識を持たない中で、驚くことがとても多かったです。

イエズス会の宣教師の時代から、教育の高さが見られたこと。往来物等多くの出版物が社会をつくり、読みたいという欲望に駆られて寺子屋が発展してきたこと。男女平等で、「教え込み型」ではなく「滲みこみ型」の少人数の主体的な個別学習であったこと。そして、楽しいから学ぶ、必要だから学ぶとは、まさに教育の原点を感じました。とりわけ、寺子屋の実際の様子を資料から読み解いたことはおもしろかったです。

実に自由で、学級崩壊状態でもおおらかに子どもを見守っている様子が印象的でした。また、数多くの本物の書籍を見せていただいて、その細微な技にも驚きました。個性が大切と言いながら、自分を含め何でも画一的で一律にやらせたい指導に一石を投じていただきました。ありがとうございました。

実際に当時の往来物にふれるなど、貴重な経験をさせていただきました。これまでは、寺子屋に通うのは一部の庶民だと認識していました。しかしセミナーを通して、往来物の種類の多さや、江戸時代の庶民の非常に高い教育水準に大変驚きました。挿絵からも見て取れ

る、当時の楽しそうに主体的に学ぶ姿勢が、まるで現代の北欧で実践している教育スタイルと通じる部分があるようにも感じます。また寺子屋で学ぶ内容について、自分の家業等、生活に直結していくものばかりのため、より子どもの興味や意欲に繋がっていたのでは、と考えました。

当時と今では教育の目的が違う部分もありますが、実践的な学びの大切さを再確認することができました。このような学びの機会をいただき、ありがとうございました。

「江戸時代の教育事情」に関しては、日本の教育史を3時間ほど受け持った経験があります。そこでのわか勉強で、藩校の教育方法に会読、輪講があり、これは今で言うゼミそのものだと知りました。

明治政府を担った若者たち（彼らは本当に若かった）があのように振る舞えたのは、詰め込みの暗記教育ではなく自らの意見をぶつかり合わせて議論する学びがあったはずだと考えていましたが、その通りでした。

今日のセミナーは、いわば庶民の初等教育である寺子屋が中心でしたが、それでも実用的でしかも応用を前提とする往来物などを学んでいたことがよくわかりました。

幸いなことに、国会図書館のデジタル化された資料が読めますから、自分なりに、もう少し当時の教材そのものを読みたいと思いました。